GSDy 企画

上野村見学会報告書

2010/1/30-31

文責：安藤達也（東京大学大学院）

0. 見学会の経緯

2008 年度の東京大学景観研であり、GS メンバーの修士論文で群馬県上野村の限界集落と呼ばれる集落における暮らしをどうしていくかというテーマが扱われました（→参考：GSyouth LetterPremium 2009 春号詳論）。

これに触発された本見学会企画者の安藤は、GS の見学会でみんなで過疎地域を見に行き、そのあり方を議論するのも面白いと考え、上野村を見学会の行く先に決めました。2009 年の 12 月に上野村を下見に行き、上野村在住の哲学者内山節先生と上野村グリーンツーリズムコーディネーターの黒澤恒明さんに協力をお願いしました。特に黒澤さんにはボランティアでいろいろな村の方々に声をかけていただき、さまざまな村の生活を体験するアイディアをいただいて、本見学会がとても充実したものになりました。

協力いただいた内山先生と黒澤さん、そして村の方々にここに感謝の念を記したいと思います。

1. 見学会の概要

上野村見学会のしおりより抜粋

□日程

2010 年 1 月 30 日（土）、31 日（木）

□お世話になる方々

講師　内山節　先生（うちやま たかし・哲学者：http://www.uthp.net/）

コーディネート　黒澤恒明さん（上野村グリーンツーリズムコーディネーター）

□構成

1. 事前勉強：過疎問題や上野村について資料を読んでもらいたいと思っています。
2. 1 日目昼過ぎ：上野村の見学
3. 1 日目午後：内山先生からレクチャー＆質疑応答
4. 1 日目夕方：懇親会（地元の若い方を交えて。）
5. 1 日目夜：参加者で議論
6. 1 日目午後＆2 日目午前：上野村での体験作業（山の仕事・もちつき）

□持ち物

★★★　財布、保険証のコピーなど

★★★　暖かい上着（今年は雪はそこまで降ってないようですが上野村は東京に較べて遥かに寒いです。）

★★★　軍手、作業しやすく、多少汚れてもよい服（2 日目の体験作業の時に）

★★★　免許証（運転される方は）

★★☆　筆記用具、メモ帳など

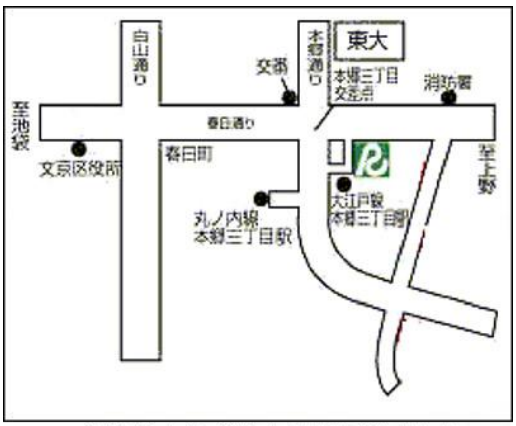
★★☆　タオル、洗面用具など

★★☆　カメラ

★☆☆　のこぎり、なた（2 日の体験作業の時に使います。あればでいいです）

□集合

1 月 30 日（土）　8:00　本郷三丁目トヨタレンタカー営業所前（下図）ちなみに遅刻されますと公共交通機関で上野村に到達するのは極めて大変なので、遅れないようにしましょう。



都営大江戸線本郷三丁目駅5番出口となり
地下鉄丸ノ内線本郷三丁目駅東大口より徒歩1分

□解散

1 月 31 日（日）　18:00～19:00 くらい　本郷付近（帰りは交通事情により遅れる場合もあります）

□費用

10000 円程度

（内訳：レンタカー代が一人 5000 円程度（スタッドレスタイヤのオプション付きなので高めです。）＋宿泊費 4000 円＋もちつき代実費 500 円）

※はじめに 10000 円集めまして残金は返却します。**1 日目夜の懇親会費は別途かかります。（3000 円くらいでしょうか）**

□スケジュール

1月30日		場所	予定	備考
	8:00	本郷三丁目集合	上野村へ	レンタカー2台で移動
	9:00			
	10:00			
	11:00			
	12:00	道の駅上野	昼食	黒澤さんと合流、そばを食べましょう。
	13:00	土谷さん宅	もちつき	せっかくなのでということでもちつきができることになりました。内山先生もここからいしていただけるかもしれません。
	14:00			
	15:00	内山先生宅	内山先生と過疎地について話を聞く	自由に質問して、それに対しての話を聞くという形にしようと思います。
	16:00			
	17:00			
	18:00	すりばち荘		一度すりばち荘へチェックイン
	19:00	居酒屋	夕食	青年団の人と会食
	20:00			
	21:00	すりばち荘	風呂など	
	22:00		感想・議論	1日で思ったことなどを共有できたらと思います。
	23:00			
	0:00			就寝
1月31日				
	8:00	すりばち荘	朝食	すりばち荘の宿泊費に含まれます
	9:00	奥名郷集落	山の仕事体験	奥名郷の集落で薪割りなど山の仕事の体験 地元の方とも話せるように
	10:00			
	11:00			
	12:00	陶芸家柴崎さん宅	お昼	昨日のおもちを食べましょう
	13:00	奥名郷集落		上野村散策（行けたら温泉）
	14:00			
	15:00		帰路	上野村出発 レンタカー2台で移動
	16:00			
	17:00			
	18:00	本郷近辺で解散	東京着	お疲れさまでした。
	19:00			

□宿泊

民宿　すりばち荘

http://www.uenomura.ne.jp/ueno2161/

住所:〒370-1612

群馬県多野郡上野村大字野栗沢 506

Tel:027-459-2161

□参加者（10 名）

安藤達也（東京大学）○

飯沼伸二郎（早稲田大学）

荻原知子（東京大学）
加藤俊介（東京工業大学）
佐多佑一（東京大学）〇
鈴木直樹（東京大学）
並木 義和（早稲田大学）
野口翠（東京大学）
前田翔三（経済産業省）
渡邊加奈（九州大学）
5 人×2 台の車で行こうと思います。〇印は運転責任者。

□緊急連絡先
迷子になったり、当日遅れるなどのご連絡は安藤まで

2. 当日の行動の記録

1/30（1 日目）

7:50

本郷のトヨタレンタリース営業所に集合、みんな 8:10 くらいまでにはそろう。

簡単な自己紹介をして、レンタカー2 台で出発。途中上里ＳＡで一度休憩。

12:05

道の駅上野村に到着。もう一台の車の方は前橋まで行ってしまったらしく、30 分くらい遅れて到着する。ここで、黒澤さんと合流する。向かい側にあるそば屋さんへ。山中天丼というおすすめを食べる。上野村の名物のマイタケやら山菜の天ぷらが多く入っている天丼とそばのセット。とてもボリュームがあって美味しい。黒澤さんは初対面のみんなに積極的に話を振って下さって、とても和やかなムードになる。さすがグリーンツーリズムコーディネーターで慣れていらっしゃるのだろうか。

あとから来た組も合流。そばを食べる。その後、黒澤さんも車に乗ってもらって、土谷さんの家へ伺う。

13:00

土谷太一郎さんの家に。道の駅のそばの勝山という集落。家の前には黒犬がいて、しきりに吠えている。ここで、土谷さん夫妻とお子さん、そして上原さんが迎えて下さる。

土間にはガスボンベが用意されていて、トチの実とお米がすでにいい感じで蒸かされている。そして、臼。この臼がまたなかなかいいものだ。臼はケヤキでできているのかな、人がぎりぎり持ち上げるか持ち上げられない位の重さで、このくらいのサイズで一つ数十万円するのだそうだ。

まずは、座敷に上がって自己紹介。黒澤さんがガムテープとマジックを用意してくれ、それに名前を書いていった。こういうのは結構重要なのである。

トチとお米を混ぜるのにはお米の方を十分すぎるくらい蒸かして（さいばしで穴を開けたりする）、水分をたっぷりと含ませておかないと、パサパサしたトチの実の味が勝ってしまうそうだ。
座敷では奥さんたちがあんこをこねている。

トチの実はドングリのようなもの。ふかしたてのトチはアクがあって、苦みが残る。

トチの実をつくのは思ったよりも大変。なかなかまとまらない。はじめにトチの実をすりつぶして粒子状にしたところで、ふかしたもち米を加えて均一になるようにこねて、つく。女の子と男の子の兄弟がいて、女の子の方とてもフレンドリーだった。家の大黒柱によじ登って遊んだり、七五三の写真を見せてくれたり。

ようやくお餅が完成して、みんなでこたつを囲んで試食会。たくさんできたお餅は、あんこをいれた丸餅のほか、平たくのして切り餅にした。ほかにも、煮物や刺身こんにゃく、赤いもと呼ばれるお芋の味噌煮など次から次へとたくさんのご馳走を出していただいた。お昼を食べたばかりでお腹がいっぱいだったけれども、ついつい手が伸びてしまう美味しさだ。

本当はもっとゆっくりしていきたかったのだけれども、内山先生との約束の時間もちょっと過ぎてしまうので、名残惜しく土谷さんのお宅を後にする。

15:15

内山先生の家へ。15 人前後の大人数でこたつを囲む。先客の方がいらっしゃる。この方は隣町の埼玉の志賀坂峠にお店を持っておられるかたで、とにかくたくさんのイベントやら特産品を野心的に開発されている方だ。一緒に混ざってお話ししてもらった。

まずは、簡単に上野村の歴史を話していただき、その後今の村の暮らしについてお話ししてもらった。今は一つのことをやっていても生きていけないというようなことを言っていた。とにかく多面的な経営をして行かないと成り立たない。

今住んでいる人は好きで残っている人が多いとも。そうでない人はみんな出ていってしまう。

住みたい人の中にも、結局教育と、病院施設がないから出ていってしまう人もいる。トンネルができて高校に通えるようになったのは大きい。寮に下宿するととにかくお金がかかってしまうからね。村ではそんなにお金が必要なく暮らせるが、外で暮らすにはお金がかかる。現金収入はそんなに得られないから、村では。

大きなシステムの中に組み込まれる中で小さなシステムが機能しなくなってきている。

村の生活の価値はお金には換算できないことが多いから、お金の話が持ち込まれるとうまくいかないんだよね。例えば内山先生の明治からの家だって資産価値ではかったら 0 円ってことになってしまう。そこに時間が蓄積した価値、歴史性みたいなものもあるけど、それはまた別の話になるわけだ。結局そこのところをみんなで共有して何か新しい価値評価軸を作っていかないとダメなのではなかろうか。

18:00

内山先生のところも予定を超過して、結局いったん宿に帰るのはなしにして、そのまま飲み屋に向かうことにする。またもやどたばたと内山邸を後にする。

道の駅の近くに戻って、居酒屋へ。上野村では一軒しかない居酒屋らしい。座敷が二つあって、片方はうちら、もう片方は上野村タイガース応援の会の飲み会があったそうだ。(今年はトラ年ですね。)

来て下さった方は、役場の方、上野村森林組合の人（こちらは大阪とか、東北とかから移ってきた方が多い。チェンソーでアートを作っている人もいらした)、などなど、とてもたくさんの方に来ていただいた。

テーブル毎に別れて、盛り上がった見たいです。車があったので、お酒を飲めなかったのが残念。

22:00

宿に帰る。

温泉に入った後（例によって、お風呂場はものすごく寒い)、みんなで感想を言い合った。感想を聞いている限りだと、今日の行程はみなさん楽しんでくれたようだ。

1/31（2 日目）

7:20

胡桃平の集落を見に行く（表紙写真はここです)。石垣がすごく積まれている。中に入り込んでみてみた。段々畑もある。

8:00

朝食。30 分頃に黒澤さんたちもいらっしゃる。

宿のご主人にアオバトが飲むという塩の水を出していただいて、みんなうーんという顔。

安藤と佐多は先に奥名郷の集落まで車を持っていって、軍曹さんの車で戻ってくる。

9:20

奥名郷の集落へ向かって歩き始める。黒澤さんと、上原さん、軍曹さんが一緒に歩いて下さる。
途中で空き屋がいくつかあり、黒澤さんが住まないかと斡旋している。

斜面に昔の畑の名残なのか、石垣が残されている点が多く見られる。途中は、車道ではなくて、昔の道を歩いていった。急斜面だ。

奥名郷の集落が見えてくる。その中の一軒のお宅にお邪魔する。中のいい夫婦が二組暮らしている。そこへ、近所のおばあちゃんも一人訪ねてきて下さって、その 5 人を囲んでのヒアリング。黒澤さんが主に司会をして下さる。ほんと、僕らと村の方々の間に黒澤さんが入って下さることで話がとてもしやすく距離が縮まっている。本当にありがたいことだ。

ここでは、逆に僕らに対してこういう集落をどう思っているの、というようなことを聞かれてみんな逆に戸惑ってしまった。

見えない作法のようなものに気付かされた。集落内の暗黙のコミュニティがある。回覧板を回しに行くついでに、ちょっと立ち話をしたり、食べ物を分けたり、そういうことをしたいよねって。

メンバーから「皆さんは幸せに暮らしていますか」、という問には、どちらかと言えば幸せだね、とにこにこしながら答えて下さっていた。健康で長生きできて。あるおじいちゃんは日本各地を見て回ってきたけど、こんなに山の中にある集落ってないでしょって。

彼らも今の若い人たちをひとくくりにくくりすぎてしまっているのかもしれない。こんな山の中で食事だって食べられないでしょ、とか、肉も食べられないなんて生活できないでしょとか。すくなくとも、僕らはここで出してもらったゼンマイや芋の煮付けをとても美味しく食べさせてもらったし、こんな生活もありだと思う。ただ、今の若者はそういう生活を知らないし、想像もできないのだけど、それはそういう生活に接するチャンスがないだけで、だから若者がそういう生活を受け入れられないとそういうことには短絡的にはならないはずだ。

上野村ではどこでも、たくさんの煮物料理や山菜料理を出していただいて、そしてそれらはとても美味しいのだ。

11:00

柴崎さんの家へ。柴崎さんは都会から移り住んだ陶芸家の方で、奥さんと子供さん 2 人と暮らしている。子供たちは毎朝僕らが歩いてきた道を歩いて学校に行っているそうだ。昔の暮らしを実戦しようとしていて、徐々にだが、いろりを復活させたり、昔の台所を使えるようにしたり、とにかく昔から住んでいる人たちより山の暮らしっぽい生活をしている。

更に上に上がったところにある。薪を切りに行く舞台と、料理をする部隊に別れて仕事を。僕らは薪

を切りに行った。奥名郷の集落の上の斜面を登っていく。イノシシに荒らされないようにとフェンスで囲われた畑があり、その上に石積みの段々畑の名残りもある。

そこから落ちている木を拾う組と、さらに上へ行く組に別れた。更に上に行くと急斜面になって、登るのも一苦労だ。靴が泥だらけになる。枯れた立ち木を見つけたので、それをのこぎりで切って、下へ落として（斜面を転がして）下へ運んでいった。

その後チェーンソーなどで木を切ったり、薪を割ったりの体験作業。

13:00

お昼タイム。お昼は猪鍋に昨日作ったお餅、それに柴崎さんの家で作っていただいた煮物やらを食べる。いろり端で存分に上野村の幸を味わう。柴崎さんの奥さんがこの家ってこんなに人が入るんだね、って言っていたことが印象的だった。火鉢も登場して、これで切り餅を焼いた。しかし切り餅はたくさん余ったので、これはお土産として持って帰ることに。

14:30

奥名郷の集落で柴崎さん一家と黒澤さんたちとはお別れ。名残惜しみつつ帰途についた。最後はのんびりしすぎてギリギリになってしまったけれども、中ノ沢の集落をちらっと見に行ってから、下仁田経由で帰った。

関越道は帰りもとても込んでいて、羽田に早く帰らなくてはいけない一人は途中から新幹線で帰ること。本隊は 19 時すぎくらいに東京に着いた。

お疲れさまでした。

3. 参加者の感想から

・安藤達也（東京大学大学院）

■上野村訪問を振り返って。

枝葉を落として輪郭のぼやけた山々はほんわかと優しく見えた。新春の上野村。雪に閉ざされて寒くて、閑散としたと山村というイメージを抱いていたが、根雪も少なく山も開け明るいところだった。木々がうっそうと茂っていないので、青い空が更に広く感じられる。

わずか 2 日間ではあったが、駆け足ながらも様々な人々の思いを聞けたように思う。とても充実した時間だった。

内山先生の話を聞いていると、村での生活はそれはそれですごく成り立ち得るんだけれども、教育や医療など村だけではどうしようもないことがあって、それがネックでみんな村を出ていってしまう。教育や医療には絶対お金がかかるから、そのお金を稼ぐには村から外に出てお金を稼がないといけない。

でも逆に村にはお金で計れないものがいっぱいあるのだ。その価値をどうやって計ればいいのだろう。内山先生の家でも話が出たが、築 100 年の家って、減価償却してしまってまったく価値のないと言うことになってしまう。でも、そこにはどんなにお金をかけても今すぐには作ることのできない時間を経て醸し出された風格があり、そこに住んでいた人たちの歴史があり、物語がある。

逆に、村の家並みが全部が全部新建材の建物に成りかわってしまうと、ひどく味気ない風景になってしまうと思う。

村には家に限らず長い時間の流れを感じさせるものが多いと思う。長い間そう変わることのない風景。山林があって、田畑があって、石垣があって、そこでの変わらない営み。こうした時間が蓄積した価値というのはどうやってはかればいいのだろうか。

経済の指標じゃなくてなにかそういったものを評価する仕組みができれば、うまく回っていくのだと思うけれど、逆にこのままだと、どんどん古いものは失われる一方でこういった長い時間の営みを感じさせるものというのは気付いたときにはなくなってしまうのかもしれない。そんなことを思った。

地元の方々と多く話す中で特に普段は聞けないようなことを聞かしていただけた。

奥名郷の集落での昔から村に住む方達との話が中でも印象的だった。家はそれぞれ別だけれども、夫婦同士で繁盛にもう長い年月付き合っていて、おたがいに家の勝手も知っていて、行き来もしていて、あたかも集落が一つの家のように感じる。

その中に、新しく入ってきた方が、そのつきあい方に困るというか、都会に住んでいる作法を持ち込んでもぜんぜん通じないことがある。集落には集落で見えない了解というか、そこの人たちが長く暮らしていたからこそ暗黙の了解として認識している作法があり、礼儀がある。郷に入ったら郷に従え、ではないが、ある程度は個人の自由で自然の多い山村に住むのではなく、村のつきあいも含めた環境を知っていないといけないのかもしれない。

でももちろん一方で、すごく村のみなさんが外から来た人に対して優しく接していただいているな、と思う。多くの人が上野村以外から村に移り住んで来ていて、それが当たり前に受け入れられているからだろうか。飲み会の席でも、お宅にお邪魔したときでも、初対面の僕らにとても気さくに接していただいた。

上野村へ移り住んできた人たちもみんな自分のやりたいことをはっきりと持っていて、村でいきいきと暮らしているなと思った。奥名郷の柴崎さんはある意味、村の人たちよりも山人らしい暮らしをしようとしている。村の伝統を守るといって村の中で閉じることなく、適度に外の人たちを受け入れることで、新しい要素は加われど、本質的な村の価値は受け継ぎ残すことにつながるのかもしれない。

これから日本全体の人口が少なくなっていく中で、地方の町や村ではますます過疎の問題は深刻になっていくし、人の住まなくなる集落が出てくるかもしれない。その中で、僕らは何ができるか分からないし、東京にいる限り何もできることは少ないのかもしれないが、まずははじめの一歩として、とにかく実際に訪れること、そこでの話を聞くことは、なんらかの意味があると思っている。

だから、これからもしばらくはあちこちの村や町を訪ね歩いて、いろいろな人の話を聞かせてもらえればと思う。

＊　＊　＊

またぜひ上野村に遊びに行きたいと思っています。今度は夏でしょうかね。

村の生活を少し体験し、何か作業を手伝わせていただいたら、と言っていましたが、逆に村のみなさんに手伝ってもらうことばかりでしたね。次こそはなにか、そういった意味でも貢献できればいいのですが…。

最後になりましたが、黒澤さん、上原さんをはじめ上野村でお世話になった全ての人に、どうもありがとうございました。

・飯沼伸二郎（早稲田大学）

■上野村の感想

はじめ僕の抱いていた“限界集落”のイメージは白黒でした。やはり「限界」という言葉の負のイメージが強かったんだと思います。

しかし２日間通して、様々な体験、上野村の人たちの笑顔に出会い、色鮮やかなイメージに変わりました。やはり現場に行って生の身体で感じることの大切さを身を持って感じました。

そして、都市や地域に携わる仕事をしている人たちの中で一体何％の人たちが現地を感じたことがあるのか？また、都市に住む僕らの周りの何％の人たちが、この問題に興味があるのか？その数は決して多くないと思います。

上野村には都会にはない豊かな暮らし、風景があって、本当の豊かさってなんだろう？と感じました。特に、夜に飲んだ若者たちの顔を見ていると、仕事に誇りをもってイキイキとしていて、むしろ都会の方が限界なのかもしれない、と感じることもありました。

・荻原知子（東京大学大学院）

■上野村を訪れて

全国に過疎の農村や漁村は多数ありますが、故郷の村であるというだけで、私情抜きには述べられない感想を多く持ちました。親や地元出身の旧友を見ていても、群馬県民は概して郷土愛が強いと思います。その感情は、時に、現状維持や現状礼賛に終始したり、よそ者に対して閉鎖的であったりという態度に、外部の意識を多少でも持つ人間にとっては感じられます。よそ者として群馬に来た母は、とっくにこのような群馬の気質に愛想を尽かし、自分を小学生の頃から東京に教育に出しました。群馬に出自を持つ自分は、小さい頃から、群馬と東京を相対的に比較したり、父の親戚一族と都会育ちの母とを比べたりして、東京を選んだということになります。私情としては、群馬や実家に対する郷土愛は皆無だと思ってきました。しかし、大学で現在の景観やまちづくりを学ぶようになってから、休日に友人たちとちょっとした遠出をする際に、つい、群馬を選んでしまったり、今回の上野村訪問の話を聞いた時も、あ、上毛三山を見たいな、と思ってしまったりする自分に気付いたことも事実です。恐らく、群馬での人生経験や家庭環境などが相まって、複雑な愛憎の感情を持っているのだと思います。

それでも、今回上野村を訪れて、ここに住む人たちがもう少しでも希望を持てるには、もう少しでも刺激（活発という意味での）があるにはどうしたらいいのだろう、と日々考えるようになりました。黒沢さん達と出会った影響は、こんなにも大きかったと、自分でも驚いています。

近代以降、特に現代では、見えないもの、が増えてきています。例えば、今日食べた人参が、どこの村のどこの畑でどんなおばあちゃんがどのように作り、誰が仕入れて誰が東京まで運んで、自分の胃袋まで届いたのか。いつも使っている押入れ箪笥が、どこの村のどこの山でどんなおじいちゃんがどんな木を伐り、誰が加工して自分の家まで届いたのか。自分の携帯電話が、どこの町工場のどんなおっさんがどんな小さな部品を作り、どこの国で組み立てられ自分の手元に届いたのか。農業にしろ、漁業、工業全てにおいて、消費する一方の都市生活者は、どのようなものに自分が支えられているのかを目にすることができません。見えないこと、それは、認識しないことを意味します。

この都市農村間の不可視の関係を少しでも変えると、両者の関係は大きく変化するのではないか、と思うのです。実際、今回のちょっとしたグリーンツーリズム＆農家ヒヤリングの体験だけで、以上のようなことを意識させられました。この関係をもっと強度に、もっと持続的にしていけば、両者にとっても、日本という国にとってもいいことがあるかも知れません。今や、生産面において、国内自給で賄っていかなければいけないと自分は考えています。

戦時中に都市の子供たちが中山間地部に疎開し、その後暫くの間姉妹都市的な関係で交流が続いた例がありましたが、現代において、都市農村間で‘姉妹関係’なり‘家族関係’なり、擬似的な関係を創出することは適していると思います。例えば、両者の小学校同士が‘姉妹学校関係’を結び、総合学習やらなんやらの授業や夏季休暇を利用して行き来して農業体験をするとか、学年ごとに畑を貸してもらったり、木工製作をさせてもらったりして、村の様々な産業を一通り知り、そこでの生産物を優先的に買うことができたりしたらどうだろうか。或いは、都市の家庭と農村の家庭が‘疑似家族関係’を結ぶことで、都市の子供にとっては農村にもう一人おじいちゃんおばあちゃんを持つことができる。その家庭はやはりある一定量の農村家庭が生産した品物を強制的に買うことにしたらどうだろうか。

農村で観光収入に依存したり、人口増加だけを見込んだりしようとするのは、つまり都市生活者の恣意に左右されるような方法では、最早対策に間に合わないと思います。あたかも自由そうで、しかしあ

る部分強制的な方法を考える必要性を感じます。

実現可能性は低いかも知れませんが、上野村滞在中のあのほんの短い間で、このようなことを悶々と考えていました。余りに安易すぎて、公言するには憚られる内容かも知れませんが、もし自分にこのような環境が与えられていたら、自分は幸せに思うに違いないと思います。日本の総体で言えば、地縁的関係が崩壊した今、農村の人たちもそういう都市生活者の意識を知って、うまく利用してくれたらいいと思います。私たちは、都会であらゆる欲望を享受し消費していますが、濃い人間関係や、安楽できる居場所には、非常に飢えています。自分にとって上野村が、今後そのような居場所になってくれたら、と願いつつ、このように考える機会を与えてくれた黒沢さん始め皆様に、感謝の言葉と致します。

・加藤　俊介

■上野村感想文

上野村にＩターンの若者の方が思ったより多くいらっしゃったので、すこし安心しました。皆さんもすごく元気でしたし。また色々なお宅で頂いた赤いもや鹿肉や豆腐のお料理が美味しかったです。

伺った二つのお宅について思った事を書きます。

１つは黒沢太一郎さんのお子さんのお宅のハウスメーカーの住宅が村の気候に長年耐えられるのか心配です。以前北海道ではハウスメーカー住宅は外壁の中が結露してしまって腐りやすいので特別な工法を工務店で共有して行っていると聞いたことがあります。上野村にも村に適した工法を大工さんがやっているのかもしれません。

もう１つは柴崎さんのお宅で枝・丸太拾いをしたときお一人で作業するより大人数で分担して作業をした方がきっと効率よくできるのだろうと思いました。今は柴崎さんのように自給自足に近い生活をしている人は少ないとは思うのですが、今後同じような生活がしてみたいと思う人が村に移り住んで来たら同じ集落に集まって住めるといいと思います。

上野村には今の日本に必要な農業も林業もあるのになんで食べていけないのか、すごく理不尽に思います。若者の方や内山さんのような外からいらっしゃった方など村を支えたいと思っている人は沢山いるのに、国はどっち付かずの政策しか持っていない。こうしたら農業、林業、過疎を支えることができるという答えはまだ出せないのですけど、それらを大切にしようとしている全国の人たちと協力体制が広くできれば解決策が見えて来るような気がします。僕も微力ではありますが一緒に考えていきたいと思います。また遊びにいきます。ではでは。

□農林業を盛り上げようとしている人々（ご存知でしたらすみません）

<日本全国スギダラケクラブ>

http://www.sugidara.jp/

〈高千穂の秋本集落の飯干淳志氏〉

宮崎県高千穂で傾斜地を切り開いて農地を作ったり、ビニールハウス農業に実験的に取り組んだりしている方。以前並木くんも僕もインターンさせていただきました。もしご興味がありましたらおつなぎで

きるとは思います。

・佐多祐一（東京大学大学院）

■上野村感謝状

黒沢恒明様、みほ様

お久しぶりです。先日は上野村への見学を快く引き受けて下さり、本当にありがとうございました。上野村というところは、山が険しく、寒さが身にしみる場所ですね。普通は村に住む方々の生の声は聞くことが難しいところを、恒明さんやみほさん、その他多くの方々のおかげで実際にお宅にまでお邪魔して、話を聞かせてもらったり、生活を体験させてもらえたのは、貴重な経験でした。

今回の見学で思ったことを申しますと、村といってもいろんな人がいて、皆思っていることが少しずつ違って、それをまとめるのはそうそう簡単なことではないのかもしれない、ということです。内山さんのように有識者の方は客観的に村の姿を見ることもできるし、広い視点で判断することもできる一方で、村に昔から住んでいる人は村の掟のようなものから外れるのは受け入れがたいし、都会的なものはやっぱり理解しづらい。村をなんとかしたいと思っている人の中でも、恒明さん達のように若い世代と、高齢の方とでは考え方も少し違うのかもしれないし、逆に柴崎さん達のように、自然だけあれば十分という人達もいる。もともと人の変化が少なかったであろう村社会に、村から出たことのない高齢者の方から、I ターンの人も、U ターンの人もいる。そんな中で何か村を変えるためにしていくというのはとても大変なことに思えました。

それに加えて、話題に出てくる産業の厳しさと、教育、医療の問題、そして実際に目の前にある空き家という現実が、村で生活することの困難さを見せてくれているような気がしました。これらの問題は、今の市場経済や、偏差値的価値観が村に合っていないということだと思いますが、かといって、もはやそれを無視できない状況で、どう村が生きて行けば良いのだろう、と改めて考えさせられます。それは、村で生活する人々がどうするか、という問題なだけではなく、都市に住む人々がどうするか、という問題とも密接に関係しています。だからこそ都市に住む人々は地方の田舎のことを知らなければならない。僕らがさせてもらったような見学も、都市に住む人々が訪れる観光も、まずは知ることに始まり、その小さな積み重ねが、いつか大きな意味を持つのだろうと思っています。

ただ、小難しいことは抜きにして、単純に餅つきをしたり、餅であんこを包んだり、山の中を歩いたり、薪をとって来たりしたことは楽しかったです。実際に村で生活すると、楽しいだけではなくて、もっと大変なことがたくさんあるのだと思いますが、このようなことが出来る場所が今、消えつつあると思うとやはり寂しい気持ちになります。国全体をどうするか、という目線で全国の村を眺めてしまえば、すべての村をどうにかすることは出来ない、という結論になってしまうかもしれませんが、実際に生活している人がいるということを忘れてはいけないなと思っています。現実に過疎問題を解決するのは容易ではなく、いろんな立場の人がいろんなことを考えていると思いますが、今できることをそれぞれの人が実際にやることが大切かなと思います。なので、僕もまた、機会を見て上野村を訪れたいなと思っています。今度は温かな春とか夏がいいですね。恒明さんもみほさんも、元気に上野村を支えていってもらえたらと思います。次に訪れたときもまたいろんな冗談を聞かせて下さい。

・鈴木直樹（東京大学）

■上野村感想文

東京大学の鈴木です。

２日間にわたり本当にありがとうございました。今回のように山村に行って難しいのは、どれだけ地域の姿そのままを出してくれるかだと思います。心配していたのは、「上野村はどんなとこ？」という質問に対して、「ちょっと不便だけど、自然がいっぱいでいいよ」「都会と違って、隣の家と物を分け合ってるよ」などの、一対一対応的な、都市からくるひとが期待している「答え」をそのまま返されるのではというものでした。もちろん上の答えの通りだろうだ思います。ただ、1 泊の短い間でこれ以上の「生活感」のようなものは感じれないし、そのような問題意識を言葉にするのも出来ませんでした。

そんな中で、黒澤さんがあいだに入ることで、地域の人が話しやすそうにしていて、「観光者」への回答以上のものを得ることができました。黒澤さんが地域の人に愛されてるのも感じました。

今回の上野村を通して、まず過疎というものに対する考えが変わりました。過疎という漠然としたマイナスイメージがただの偏見だったことに。もちろん、「若者の将来不安」など問題点は多々あると思いますが、それは同一の視点ではやはり語れないことで、でも同一の次元で考えなければいけないことだと再確認しました。そして、これはわたくし事なんですが、仕事に対する考えが変わりました。自分の仕事に対する熱い誇りや楽しみのようなものを感じました。

最後に東京に寄る際には東京大学と自称下町の葛飾柴又にまでおこしください。

・並木 義和（早稲田大学大学院）

■ 見学会で思ったこと

2009 年夏の広島・鞆の浦見学会に引き続き、今度は中山間地域の群馬県上野村にお邪魔することになった。今回の見学会の趣旨は、中山間地域のいまを自分の身体で体験して目の当たりにすること、そこから見出せることは何なのかを考え、次に繋げる機会にすることだと個人的には捉えている。

なかでも印象に残るのは、スケジュールの大半が地元住民の方々との対話に割かれ、また本物の何%もできたかはわからないが体験を通じてみえてくる山の暮らしをひしひしと感じられたということ、そして、決して便利な場所ではない上野村に住む人々の思いをたくさん聴けたこと、そしてやっぱり村の人はみんな面白い人たちだった！ということだろう。

初めに伺った土屋さんのお宅では、あまり見たことが無いトチの実をふんだんに使った餅つきの体験に始まり、アカイモの甘辛味噌煮っころがし、味付けが本当に丁度いいたくあん漬け、一度乾燥させておけば保存も効くし味も締まる大根や人参の煮物･･･と地元の知恵がたくさん詰まったおいしいもんのオンパレードに圧倒された。一つ一つの道具や食べ物に関して、話し出したらキリがないほどの蘊蓄を持っているし、それが生活に密着しているからこその説得力には本当に驚かされるとともに純粋にすごいと思えるのだ。そして、哲学者の内山節さん宅では、数々の示唆に富んだお話をいただいた。上野村の歴史を概観するとともに、いまの上野村とは一体どういうところなのか、内山さんなりの視点で語っていただいたのだが、特に面白いなぁと思ったのは、現代人は都会の暮らしにはある程度順応できるけ

れど、田舎に住むには数々の生きる技術が必要だという話だった。自営で生活する場合は、常に工夫していなければ、そして生産や管理の仕組み、流通はどうするのか、という経済的な範疇までも幅広くカバーできる視野を持たなければ、状況も刻一刻と変化する中で柔軟に生きていくのは難しい。また、一方で若者の地域離れが進む理由には、漠然とした将来への不安と、病院や学校が無いという物理的な要因が重なり、非常に厳しい状況である･･･ということ。聞けば聞くほど、私たちはどうすればいいのかわからなくな
る。そこはシンプルに考えて行動していくしかないのかなぁと、うっすらと道筋が見えそうで見えない感じがもどかしかった。夜には、上野村にＩターンでやって来た森林組合の方からＵターンで役場に勤めている方まで、これからの村を背負っていく若者といった方々とお酒を酌み交わす。やはり、現場の声は現場の声だ、と思った。なぜこの村に来て色々と頑張ろうとするのか、そうした思いを聴けたような気がする。長い夜は更け、宿に戻るとゆうに 0 時をまわる頃になっていたが、ひとりずつ感想を言うに留まらない話をした。このとき、同じ世代でも悩んでいるのは自分だけではない、ということを知って心強かった。翌日には奥名郷という集落にお邪魔して、再び地元の方のお宅に伺う。そこでもフキをいただいたりと、思い返せば食べ過ぎな旅だったなぁと思うのだが、元々の住民の方と、新しく入ってきた住民の方とはやはり考え方や習慣などが違うのだ、ということを感じた。それから、ガスや電気に頼らない、昔の知恵を最大限に生かし、当時の生活を復元しようという思いのもと移住された柴崎さんのお宅に伺う。当時の雰囲気を感じるため、火をおこすための薪拾いをしに崖のような山をよじ登ったり、薪割りをしたり･･･。火おこし一つとっても” 仕事” という感覚が付きまとった。最後には罠猟で仕留めた鹿肉の汁とお餅をいただいて、目まぐるしく上野村をあとにしたのである。

思い返せば体験に対話の繰り返しで、ゆっくりと町並みや山並みを眺める時間も無かったが、むしろこれでよかったんだなぁと思う。上野村の人々がどんなことを考えているのか、それはたくさんの人と会って話をしなければわからないことだし、なにより今回の見学会のコーディネーターを務めてくださった黒澤恒明さんのお力なくしてこの見学会は無かったのだと思うと、” 人” の存在はやはり外せないなぁと強く再認識する機会となった。(もちろん幹事の安藤君がいなくてもこの企画は無かったと思う。ありがとう！)

■ 宿(すりばち荘) にて、みんなで話したこと

感想で終わってもよかったのだが、今回の見学会のなかで、いくつか本当に考えて動かなければいけないとの思いを強くすることがあったので、書き記しておきたいと思う。特に、初日の夜に見学会参加者全員で話しあった内容を、自分自身が忘れないためにも。

□過疎って何か？限界集落って何か？

最近どこでも過疎だ限界集落だという話が出てくるが、定義は一応あるものの、何を以てそう判断できるのかはわからないのではないか。それは、外部の人が軽々しくそう言っていいのかということにも繋がるのだが、さらにいえば、実際に住んでいる人の気持ちはそんなこと関係ないかもしれない。今後地域がどうあるべきかという問いには、簡単には答えは出せないし、軽々しく言うものでもないとは思う。しかし、一方でこのまま現状を放っておいたとき、10 年 20 年経ったらどうなるのかをシビアに考えると、私たちができることは何なのだろうか？

私が個人的に思うのは、どこの場所においても、物質的な豊かさと心の豊かさや居場所のようなものは対応しているわけではなくて、都市と地域の二項対立で話ができるわけでもないということである。もちろん最低限度の物質的な豊かさは目指すべきだとは思うのだが、自分の住むまちにどれほどの居場所があるのか、満ち足りているかどうかのほうが重要なのではないか。そう考えたときに、「この場所が好きだから、不便でも住んでいる」という意見が抜け落ちる形で、過疎だ限界集落だと決めつけてしまうのは少々危険な気がする。

□都市―地域を繋ぐ要は？

上野村に限らず、これまでにお邪魔してきた地域において特に感じるのは、都市や地域を繋ぐ架け橋になれる人がいるかどうかが大きい、ということである。ただし、それには地域に住んでいる人の気持ちがわかるということ、つまりどちらの立場の気持ちもわかる人であることが重要だと思う。

現実的な問題として、地域の担い手が足りない状態が続くと集落の根本的な維持が難しくなる。じゃあ、若者を放りこめばいいのかというと、そんな簡単な話でもない、という風に思う。なぜなら、価値観の相違がある以上、お互いの言い分はあるはずで、そこがうまく溶け込めなければひとつの集落としてやっていくのは難しい、と思うからである。

私の今までの経験上では、勝手にポンと地域に飛び込んだところで何ができるのか、という気持ちになってしまう。ただし、それがきっかけで終わるのではなく、そこからは自身の努力で動くことが必要なのだと思う。

□日本人としての拠り所はどこにあるのか？

日本は2005 年に人口減少に転じたが、この先20 年30 年を考えると、どうなってしまうのだろうか？地域という地域は消えてしまうのか、それとも、都会から人が消え、田舎に回帰する人が急増しているのか。

シビアにみて、無くなる地域は無くなるし、残る地域は残ると考えたときに、流れに身を任せてしまうのは本当にいいのだろうかと疑問に思う。これまで日本の文化なり生活を支えてきた基盤である地域、細かくいえば集落が消失することは、日本人としての拠り所の喪失につながるのではないか。為す術も無く見過ごしているだけでは何の解決にもならないという、なんとも言いようのない不安がある。

とは言ったものの、自分の身の振り方は結局どうなんだ、と言われると悩む日々が続いている。地域に通えば通うほど、どうしたらいいのかという思いが強くなるが、勉強したり研究したり、色々なことを経験していくなかでできあがっていく価値観のなかで、自分がやれることをシンプルにやればいいのかな、とも思う。ただ、三つ目に挙げたように、日本人としての拠り所というか、誇りというのは絶対に持っていたいし、そのためにできることが何なのかをこれからも突き詰めていきたい。そんなことをぐるぐると思った見学会だった。

最後に、上野村でお付き合いいただいた地域の方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいであるし、それから、幹事を務めてくれた安藤君、ともに語り合った参加者のみんなにも、ありがとうと言いたい。またみんなで上野村に行きましょう！

・野口　翠（東京大学大学院）

■上野村訪問感想

・印象

想像していたより、ずっと活気があり、明るい雰囲気であった。
若者ががんばっているな、という印象が強い。

・外部者のはたらき

想像以上に、村の外から移入してくる方が多いことに驚いた。
林業やデザインなど、手に職を持って計画的に移住している方が多いのを見て、
彼らが村を変えていくのではないか、との可能性を感じた。
彼らの才能を活用していく土壌（制度）をさらに醸成していく必要がある。

・新参者との融合

新しく村にやってきた者に対する対応に、まだ慣れていない状態だと思われた。
お互いの胸の内を秘めておくのではなく、対話の場を意識的に設けて、敷居を解消していく必要があると思う。

・新規事業

事業を興しビジネスとして成り立たせていくのは、もちろん困難も多いだろうが、
高橋氏のように、積極的に外部と交流し、新たな事業のヒントを得ている姿はとても頼もしく思えた。
思うに、農作物を例にとると、栽培から流通、販売まで一手に自分たちでやろうとするのは現実的でなく流通以降の部分は、専門の業者と組み、効率的なやり方に乗っていくのがよい方法なのかと思う。
　持続的に成り立たせていくには、ある程度名を売り、量がないと、という意見があったが、考え方次第とも思う。つまり、少量生産でもそれなりのブランディングを行えば、相応の価格で売れるようになるのでは。それには、世の中の価値観自体が変わらないといけないのかもしれないが。

・ツーリズム

観光の視点から見て、とても魅力に富んでいると思った。山の神をあがめるという精神性や、囲炉裏のある昔ながらの生活は、外国人はもちろん、日本の若者にとっても
新鮮で、魅力的に映るものだと思う。自然環境はもちろん“生活”にこそ村の魅力があると思うが、たとえば、田舎体験などの形で外部者が生活空間に入ってくることを、村の人々はどのように考えているのか、聞いてみたかった。

・意思決定

昔からそこに住む人が、なぜそこに住んでいるかと言えば、そこにあるコミュニティに属しているから。
だとすると、就職のために村を出て行った人は、余程の理由がない限り戻ることはないのかと思う。
　今、上野村に住んでいる人々は、この状況をなんとかしたいと思っていたとしても、
どんな選択肢があるのか、どういった施策が行われればどういう結果になるのか、

意思決定するために考える材料もない状態であると思った。
そこは、政府、専門家や、NPO 等外部機関が、情報提供をしながら一緒に考えていかねばならない。

・前田翔三（経済産業省）
■【上野村見学会感想文】
http://www.gsdy.org/letterpremium/critique2009spring

ムラの将来を考える、ということをひとつの切り口として日本のこの先の２０年を考える、ということを一応修論以来継続してやっているつもりです。

この継続、ということは恐らくとても大切で、なんだかんだばたばたしちゃう仕事をしているので、無理矢理にでも考える時間をつくるということが大切だと思う訳です。だから僕はムラに行く訳です。そこに行けば否応なく、なにかを考えるので。

諸々考えるし、社会人になって一年弱、自分もいくらか変わったなと思います。内山先生や結城登美雄さん的な生産者を起点とした考え方も昔だったらそのまま自分の考えになってたろうけど、今は自分のなかで対立軸をもって、止揚させながら考えるということをするようにもなった。他方、考え方の純潔さみたいなものは失われていると思います。

ムラがなくなっていくことにすごく寂しさを感じるということを今まで「農業のこれから」とか、「人間と自然が作り上げた関係性の妙」とか色々理由づけてしゃべってきたけど、結局は（あまり好きな言葉じゃないんだけど）「コミュニティ」ということだろうと思います。
農業がどうとか、集落がどうとか、景観がどうとか、じゃかなくて、この国の２０年後を考える上で大切なものがきっとムラにはあって、それが失われていくと、なんだかこの国の２０年後を考えるとっかかりが消えていっているような気がしてしまう、そんな感じなのかもしれません。

そして、１人の余所者として、上野村が好きです。いつまでも「余所者」として上野村が好きでいるんでしょうが、僕の持ち場と意志からして、その関係こそがいいんだと思っています。

・渡邉加奈（九州大学大学院）
上野村見学会に行く前、「過疎」、「過疎」って自分も言っているけれど、これって何なのだろう？などと曖昧に思考を巡らせていました。上野村に行こうと決めたとき、自分が「過疎」というものをどう捉えるのかーどういう認識を持ち、どういうスタンスをとるのかーということを上野村を歩きながら、他の参加者と議論しながら、考えようと思いました。

結果として、わたしの中での「過疎」というものに対する認識はある程度はっきりとしてきたような気がします。
結論は、「過疎」というものは、ただその地域の状態を表す言葉であって、決して「過疎の村」と名づ

けられてしまう村なんてないということです。ある地域について考えるとき、「過疎」はその地域の課題のひとつとして取り上げられるものであり、それ以上でも以下でもない、と思います。

では、「過疎」というのは本当に問題なのか？それは、やはり問題です。理由は「集落機能が低下するから」です。

たとえば、上野村では山水をパイプで山からひいて利用しているそうですが、冬にその水が凍ってしまったとき、誰かが山に登ってそのパイプの凍った部分を探しあてて対処しなければならない。それをできる人間がいなければ困る、というようなことです。他に、山の上にある神社の管理も地区のお祭りにも人手がいる。特に若者が必要だ、ということです。

「過疎」はあくまで課題のひとつといいながらも、これはやはり軽視できない大きな課題だと思います。

では、「過疎」に対してどう対応していけばよいのか。

以下、内山さんの見解を参考に整理してみると、まず、（上野村に限らないかもしれませんが）上野村で過疎化が進む要因の鍵は、「教育」と「産業」にあるそうです。

「教育」に関しては、通学可能な範囲に（いわゆる進学校など）志望の高校がなければ高校から下宿しないといけない、下宿させることは両親の金銭的負担が大きくなって大変だから、子どもが大きくなったときのことを考えて、村を出て街に暮らすことを選択せざるを得なくなる、ということが要因です。これに対しては、県や国などのレベルで取り組むべきところかもしれません（条件不利地域に教育の補助金をつけてあげる、など）。

「産業」に関しては、とにかく「林業も農業も儲からない」「かわりになる仕事もない」ということが要因です。これに対しては、国レベルですべきことと各市長村レベルですべきことがありそうです。国レベルとしては、林業や農業を、正当な収入を得られる産業にしなければならないということが大きな命題です。各市町村レベルでは、観光産業やコミュニティビジネスのような新たな産業を盛り上げていくことが必要になります。

大きな国家システムの改変とともに、地域の中で回していく小さな仕組みの創出、その両輪で地域をなんとか維持していく、というのが現状として目指すべき方向のようです。口で言うのは簡単でも、これは実際にはとても難しいことだと思います。特に、国家システムの改変なんていうことは。

「過疎」という課題への対応についても、一般的に論じれば以上のようなことになりますが、私としては、やっぱり、地域に関わる人間のスタンスとして、「過疎」は課題のひとつであり、その地域における「過疎」という課題の重さの程度や要因によって、対応策のあり方も地域それぞれの個別解になるだろう、という風に考えます。

以上が今回の見学会を終えての、今の時点での自分なりの結論です。

参加者との議論の中では、わたしとはまた違う意見が聞かれて、これもまた参考になりました。国家全体で見るとどうか？農業の問題はどう考えていけばよいのか？過疎地域を失うことは日本人の拠りどころを失うことにならないか？中山間地域などは食料供給の視点で考えればなくなってもよいとは言え

ないのではないか？などなど。
　議論の中で特に考えさせられたことがあります。「仕事をしていれば必ず判断を求められるときがある。そのときには自分のスタンスを決めないといけない」という意見です。わたしはそのとき咄嗟に「スタンスは立場によって変わるものだし、ひとつのスタンスを決めなきゃいけない人もいるけど、決めなくてもいい人もいるでしょう」というような曖昧なことを思いました。

　福岡に戻り、研究室の先生に上野村見学会で考えたことを話していたら、こんなことを言われました。
　「立場によって変わるのは『表向きのスタンス』でしょ。『自分のスタンス』はいつでも裏側に持ってればいいんだよ。」
　それならば、わたしは迷わず「あるひとつの地域に暮らす人のためにどうするべきか」ということを「自分のスタンス」として一番大切に考え続けていきたいと思います。過疎であろうがなかろうが、地域に向き合うときの姿勢は同じ。「過疎」という言葉にその地域の本質はあらわれません。

　最後に。
　「過疎」というのは単に課題のひとつだと言いながら、やはり大きな課題であることには違いありません。これからも、「現場感覚」を養いながら、「『過疎』をどう捉え、何をしていくのか」ということを自分なりに考え続けてゆきたいと思います。

4. 会計報告

会計	名目	一人当たり	人数	合計	備考
収入	参加費	10000	10	100000	
	GSdyから			7350	
合計				107350	
支出	宿泊費	4000	10	40000	
	レンタカー	19267	2	38534	
	もちつき			3800	
	高速	1750	2	3500	車1(ETC)
	ガソリン			3200	車1
	高速	6330	1	9330	車2
	ガソリン	4450	1	4450	車2
	お土産代			7350	車2
出費計				110164	
差額		-2814			

＊差額は前田さんに負担していただきました。どうもありがとうございました。

GSDy 企画
　上野村見学会（2010/1/30-31）報告書

編集・発行　安藤達也

2010 年 4 月